

特技懇誌の企画に携わって

巻・頭・言

令和3年度特許庁技術懇話会 副代表委員／編集委員長 河内 悠

特技懇副代表委員／「特技懇」誌編集委員長を務めております、河内 悠と申します。令和3年度の特技懇誌の企画、編集、発行は、私のほか、編集委員4名、広報幹事1名の体制ですすめており、今回の302号が現体制にて発行される初めてのものとなります。1年間どうぞよろしく願いいたします。

私は現在特許審査を担当しておりますが、審査業務が新型コロナウイルス感染症の影響を受け始めてから、既に1年が経過しました。その間、従前当たり前に行っていた業務を継続するために、様々な工夫をしたり、仕事のやり方を変更したりするなど、継続的に状況変化への対応が求められました。結果として、目の前にある業務をいかに処理していくかという点に集中することとなって意識が内向きになり、自身の担当外の業務への関心が薄れがちでした。

そのような中、特技懇誌の編集委員長のお話を頂戴しましたが、私自身も、他の編集委員も、雑誌類の企画・編集に関する経験はなく、前任者のアドバイスを得つつ、試行錯誤しながら、検討を進めることになりました。各号の企画にあたっては、まず、特集テーマを設定します。特集テーマは、特技懇会員の関心を引き、会員の研鑽に資するものであるべきですが、一方で、複数の執筆依頼先を想定できるものであるとの要件も満たさなくてはなりません。そのためには、特許庁の内外にわたり、どこで、誰が、どのような業務・活動を行っているか、という点を調査し、把握する必要があります。

読者視線を意識すべきとも考え、特技懇誌について周囲の方に伺ってみると、知人の寄稿は興味を持って読むが、最近では審査業務も大変になっているし、明細書と一

日格闘した後に堅い記事を読むのはハードルが高い、との意見もありました。率直なところ、これまで私も同じように感じておりましたが、自身の反省も込めて、内向きになりがちであるからこそ、意識的に直接担当しない業務・活動等にも関心を向けるべきなのではないかと考えました。

編集委員会における数週間の検討の結果、本号の特集テーマは、「国際業務」とすることとし、庁内外で国際的な業務を担当された方々に記事を執筆いただくこととしました。多くの方のご協力により、執筆者のご所属や、赴任された国（地域）といった観点で、多様な記事を揃えることができました。面識のある方が執筆されているケースもあるでしょうし、そうでなくとも、普段触れる機会の少ない海外の情報という点で興味深い内容となっているものと思いますので、本稿の左側にあります記事タイトルと執筆者のお名前をご覧いただいて、関心をお持ちいただけた記事から、是非冊子を開いてご一読いただければと思います。

最後となりますが、大変お忙しい中、趣旨にご賛同いただき執筆をご快諾いただいた方々と、オンラインでのコミュニケーションに限られる等の種々の制約の中で、現体制における初号の発行にご尽力いただいた令和3年度の編集委員・広報幹事の皆様に感謝申し上げます。

なお、本誌の内容に関するお問い合わせがありましたら、巻末に記載しております連絡先までお寄せください。また、本誌への寄稿について関心をお持ちの方がいらっしゃいましたら、上記連絡先までお早めにご連絡ください（編集方針等の都合によりご希望に添えないこともありますので、予めご了承ください）。